

2020年5月18日～23日 各家庭でのディボーション用テキスト

## ■信頼性の訓練（中編）

「心」こそ、最も根本をなすものである。なぜなら、それは私たち自身であり、ありのままの私たちだからである。その私たちの心が、実は生まれつき罪に満ちているため（マタイ 15:19）、主は言われた。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ……」（エゼキエル 36:26, 27）。神を見ることができるのは、心のきよい人である（マタイ 5:8）。「人は心に信じて義と認められ」（ローマ 10:10）。また、こうも教えられている。「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく」（箴言 4:23）。善良で、汚れのない、品位のある新しい心こそ、幸福で有用な人生に欠くことのできないものである。

若い人がすべて、ダビデのように、その将来をはっきり知ることができるわけではない。ダビデは、サムエルが来て、油注ぎの儀式を行なったこと（1サムエル 16:13）について、おぼろげにしか理解していなかったかもしれないが、それでも、いつか遠い将来に、自分が民の上に立つ王となるのだということを意識していた。若い人々のうちある者は、早くから、自分がどのような道を進むべきかを心得ている。たとえば、ヨセフは、自分が為政者となるように召されていることを自覚していた（創世 37:5-11）。ヨシュアは、軍の統率者となるために召されていることを知った（民数 27:18-23）。ヨハネは、主イエスの先駆者であることを自覚していた（ルカ 1:76, 77、ヨハネ 1:22, 23）。またある人々は、自分の進むべき道をずっとあとになるまで知らなかった（とはいっても、奉仕の始まる直前まで知らなかったのではなく、十分に事前に示されたのであるが）。たとえばモーセは、柴の燃えている所で示された（出エジプト 3:1-10）。シモン・ペテロはベツサイダの浜辺で（ルカ 5:1-11）、タルソのサウロはダマスコの門のところで（使徒 9:1-6）示された。

実に多くの若い人たちが、人生のさまざまな問題のために悩んでいる。もし彼らが、至高なる神が自分に求めておられることを知るなら、それらは直ちに解決するであろう。彼らは、人生の計画が確定している人々を見て、心ひそかにうらやましく思う。自分は聖職につくべきか、宣教師となるべきか、教師か、看護婦か、農夫か、それとも他の職業につくべきか。彼らは自分がうらやましく思う人々ほどはっきりと主のみこころを知らないからである。

どのような計画を立てたらよいか。大学では何を専攻すべきか、選択科目はどれにするか。将来に備えて、この夏はどんなアルバイトをしたらよいか。しかし、とにかく、生涯の使命が何で

あるかを知っていようといまいと、将来のために最もたいせつなことは、現在目の前に置かれている義務を全うするということである。なぜなら、信頼性の訓練のためには、与えられた仕事を欠けなく行なうことが要求されるからである。現在与えられている義務を全うする者が、将来についていつになっても教えられず、暗やみの中に取り残されるなどということは決してない。光は必ず差し込んでくる（詩篇 112:4, ヨブ 22:28, 23:8-12）。忠実に任務を果たす者は、夢の実現を見、それは決してむだになることがない。かえって人々から信頼されるようになり、義務を果たすことに喜びを覚えるようになる。

ダビデは、定められた日常の務めにも、また特別な機会にも忠実であった。彼は父の羊の番をするように言われた。それは全く見栄えのしない、決まりきった仕事であった。彼はまた、自分から琴を練習していた。彼は羊の番をすることにも、琴の練習にも、真剣に取り組んだ。父の羊を襲う獅子や熊を彼が恐れなかったことは、父の言いつけをあくまで守るために群れを守ろうとした忠実さを示すものである（1サムエル 17:34, 35）。私たちは、幼い子供や青年たちに、ダビデのようにあくまで任務を全うするように教え、怠惰という名の獅子や、たいくつという名の熊に立ち向かえるような勇気を養うように、しむけてやらなければならない。自分を犠牲にするようなことがあっても両親に従い雇い主に忠実である者は、いつか必ずやって来るゴリヤテとの大戦に、きっと勝つことができる（36-51 節）。

人々が自分の務めを果たしたと思って自己満足しているとき、ダビデは琴の練習（それは言いつけられた務めではない）に熱中している。彼はそれほど熱心にならなくても、ただ二、三曲ほど覚えるつもりで練習してもよかった。ところがそうせず、「じょうず」にひけるように努めたのである（16:17, 18）。おそらく他の羊飼いの少年たちは、彼がそれほど多くの時間を琴の練習のために費やすのを見てあざけり、しかも心の中ではひそかに、彼の腕前をうらやんでいたのではないだろうか。いずれにしても、彼の技量を発揮する時がやって来た。サウル王が、このベツレヘムの羊飼いの少年を、琴をひかせるために召したからである。

青少年に対する今日の教育法の一大欠陥は、物事の達成ということをあまり強調しないことである。若者や娘たちは一応は勉強する。しかし、やさしい算数は知っていても、少しこみ入ってくるとわからなくなる。楽器を手にしても、ざっとひととおり習うだけである。本も時々しか読まず、書く文字に気を配ることもない。仕事をするにも、言われたことだけをする程度で、それを深く研究したり改良したりする熱意に欠けている。彼らにできないことはほとんどないが、ほんとうに熟練した腕は持ち合わせていない。しかし、今日要求されているのは、広く浅く式の人ではなく、むしろ一つのことでも完全にこなすことのできる人物なのである。（次回に続く）

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第十二章「信頼性における訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。